

むかあしね、あつたてんがな

あるところに、お母さんと男の子がふたり、暮らしていました。

ある秋の、雨のしぼしぼ、しぼしぼとふる日暮れがたのことです。お母さんが、子どもたち、

「わたしは、これからごみを捨ててくるから、いい子で待ってなさいよ」といって、箕の中にごみを入れて出て行きました。

ところが、まっくらになっても、お母さんは、帰って来ません。ふたりの子どもは、雨の中をさがしに行きました。

「お母さん、お母さん」と呼びましたが、どこをさがしてもお母さんは見つかりません。

そのうち、湖のほとりまで来ると、水の中に、お母さんの持っていた箕とぞうりが、ふうわふうわ、ふうわふうわと浮いていました。

「あつ、お母さんは、ここに落ちた」

子どもたちはそう思って、

「お母さん、お母さん」と、せいっぱいの声で呼びました。すると、湖の水が、さわさわさわわつとゆれたかと思うと、角の生えた竜が、首を出しました。竜は、

「わたしは、おまえたちの母さんだよ。毎日、ここにごみを捨てたので、この主に見こまれて、竜にされてしまった。もう、うちへは帰れない」といいました。そして、

「おまえたちに、わたしの目の玉をひとつやるから、町へ持って行って売りなさい。そのお金で、みそやお米を買って暮らさないね」といいました。そうして、竜は、カギのような手で、片方の目玉をひっこぬいて、子どもたちにくれました。

つぎの日、子どもたちは、その目の玉を持って町へ売りに行きました。

「竜の目玉はいらんかあ、竜の目玉はいらんかあ」といって歩いてみると、町の人が、

「片目か、両目か」と聞きました。

「片目だ」と答えると、

「片目なら、いらん」といって、だれも買ってくれませんでした。

子どもたちは、しかたなく、湖のほとりに行って、

「お母さん、お母さん」と呼びました。すると、湖の水が、さわさわさわわつとゆれて、角の生えた片目の竜が、首を出しました。

「おまえたち、どうしたんだ」

「だれも片目を買ってくれない。両目じゃないとだめだっていうんだ」

「しかたがない。もうひとつ目玉をやるから、持っていけ」

竜は、カギのような手で、もうひとつの目玉をひっこぬいて、子どもたちにくれました。そして、

「これで、わたしは、目が見えなくなった。夜が明けたか日が暮れたか、いっこうに分からなくなった。もし、みそやお米をじゅうぶんに買ってお金があまったら、そのお金で、つりがねをひとつ買って、山の上に下げておくれ。そうして、夜が明けたら、つりがねを、ごーんとひとつ鳴らしておくれ。日暮れになったら、ごーんごーんと、ふたつ鳴らして、時を教えておくれ」といいました。そして、湖の底へしずんでいきました。

子どもたちは、竜の目玉をふたつ持って、

「竜の目玉はいらんかあ、竜の目玉はいらんかあ」といって売り歩きました。

ちようど、絵描きが、竜の絵に目を描きいれようとしていました。絵描きは、竜の目玉を高い値段で買ってくれました。子どもたちは、みそやお米を買って、あまったお金でつりがねをひとつ、作ってもらいました。絵描きは、竜の目を描き終わると、そのつりがねの中にほんとうの竜の目玉を入れてもらいました。子どもたちは、つりがねを山の上に下げてもらいました。つりがねは、ぴかぴか、ぴかぴかと、鏡のようにかがやきました。毎日、夜明けと日暮れには、だれかれなしにかねをつきました。

そのうち、「あのつりがねはお化けつりがねだ」といううわさが広まりました。かねをつくたびに、

うーみいゴオン かーわいゴオン

おおつ みいでら
大津の三井寺へ ゴオオン

と鳴るのです。やがて、

「こんなおつかないお化けつりがねは、とてもつけない」といって、だれもつかなくなってしまいました。

湖の底のお母さんは、まっくら闇の中で、夜が明けたのか、日が暮れたのか、いっこうに

分からなくなりました。

そのうち、五十人力の力持ちが、鉄のげたをはいてやって来ました。力持ちは、お化けつりがねの話を聞くと、

「ひとつ、ためしにたたいてみよう」といって、サザエのようなげんこつで、つりがねを、カッキーンとたたきました。すると、つりがねは、

うーみいゴオン かーわいゴオン

大津の三井寺へ ゴオオン

と鳴りました。

「こいつは、どうもふしぎなつりがねだ」

力持ちはそういって、またひとつ、カッキーンとたたきました。すると、やっぱり、

うーみいゴオン かーわいゴオン

大津の三井寺へ ゴオオン

と、鳴りました。力持ちは、

「こんちくしようにめ。そんなに行きたけりや、どこへでも行ってしまえ」といって、つりがねをけとばしました。すると、つりがねは、まるで生きているように、「ごろん、ごろんと、転ころがって、山をくだっていきました。

つりがねは、どンドン、どンドンくだって行って、大津の三井寺の前までくると、ぴたと止まりました。あたりで遊んでいた子どもたちが、それを見て、

「きれいなつりがねが転がってきたぞ。きれいだなあ」と、寄よってきました。そして、ひとりの子どもが、

「鏡みたいだ。おらの顔がうつる」といって、指先ゆびさきで、ちよつとさわってみました。そのとたん、ばちーんと大きな音がして、つりがねは、まんなかから割われてしまいました。

いまでも、大津の三井寺に行くと、割れがねといつて、そのかねが下がっているのだそうです。

いきがポーンとさけた

村上郁再話

資料『雪の夜に語りつぐ』河原政雄語り／福音館書店